

会誌

第 30 号

平成 2 年 3 月

30

卷頭言	本多啓七
研究発表	
1. 食糧植物と文化植物の変遷と将来	本多啓七 1
2. 日本海沿岸(福井県~秋田県)の タブノキの呼称とその語源について	本瀬晴雄 37
3. 氷見市朝日神社、スタジイ林の森林構造	佐藤卓 41
4. 御嶽及び立山の環周地帯に みられるヒカリゴケの分布	山岡正尾 48
5. 小型ゲージ内におけるスズメの繁殖能力	大田保文 63
6. ミツバチの訪花植物	田中忠次 68
7. 白岩川山地溪流の水生昆虫	川添憲三 82
8. 宇奈月のサル、今、サルと人間の共存を求めて	若林一成 87
9. 米山周辺の野外研修会	若林一成 89
本会記事	94
編集後記	95

富山県生物学会

会長 本多啓七

近年ほど緑の植物が生命の根源として重視されるに至った時代はないと思います。これは産業革命後に急速に起きてきた各種の自然環境破壊の内容が地球規模の大きさに進行していることを地球科学によって確認されるようになったためです。その結果、この地球が太陽系の惑星として、46億年間の悠久の歳月を掛けて創りあげてきた地球生命圏（biosphere）が危機に瀕していることが判明してきました。例えば、先進国を中心とする経済活動水準の高度化を背景として被害や影響が一国内にとどまらず、国境をこえて地球全体に及んでいる酸性雨による森林や湖沼への被害、フロンガスによるオゾン層の破壊、CO₂やフロンガスなどの「温室効果ガス」の濃度の上昇による地球の温暖化など、また開発途上国における貧困、人口の増加や都市集中、経済活動の拡大などを背景として生じる森林や土壌や水などの環境資源の劣弱化、さらに熱帯林の減少によって、砂漠化が進行し、野生生物種が減少するなどの問題が続出しています。今後は地球環境の再生に取り組みねばならない時代となっています。

さて、本学会は創設以来地域の自然環境に密着して、生物の各方面の研究を続けていますが、各種の環境問題が上述のように続出している現在、生物科学の方面においても従来の行動発想を生かしていろいろな研究活動が一層期待される時代となりました。会員各位の研究活動と発展を期待して止みません。